

本報告の主題は、①ルドルフ・オットーが『聖なるもの』で論じた「ヌミノゼ感情」に、科学哲学者・戸田山和久『恐怖の哲学—ホラーで人間を読む—』の「恐れ的情動」論を適用すること、②「イスラーム過激派・過激思想」という語法に見られる「過激」概念を批判し、概念を再構築することの2つである。

### ①「ぞっとする」感じとは何か？—『聖なるもの』と『恐怖の哲学』の仮想対話—

プロテスタント神学者・宗教哲学者であるオットーの『聖なるもの』（原著出版1917年）は、宗教学の古典の一つではあるが、「聖なるもの」が畏怖かつ魅了という両義性を持つという点以外、今日参照されることは稀である。だが、オットーが宗教の「本質」とみなした「ヌミノゼ感情」という宗教体験は、まさに悪霊に「ぞっとする」感じをその原型としていた。ということは、『恐怖の哲学』の脳科学や認知神経科学の成果をとり入れた「恐れ的情動」論を適用することで、『聖なるもの』のバージョンアップができるのではないか？

宗教を現代に蘇生しようとしたオットーと唯物論者を名乗る科学哲学者・戸田山氏は、一見正反対の立ち位置にある。ところが、興味深いことに、「ぞっとする」感じを現象学的に記述する過程でその「身体性」に注目し、さらにそれを理論的に説明づけようとする点で符合も見せている。

戸田山氏は、その「ぞっとする」感じの正体を次のように説明している。「恐怖のもつ「感じ」は、中間レベル（脳内の外線条皮質での情報処理のレベル）が表象している対象である身体的反応もっている性質にほかならない」（p.419）。その感じは、その「表象がワーキングメモリに送られるときに生じる」（p.420）。この説明は、宗教体験の対象である神や霊が実在するかどうかには関係なく、人間がもつヌミノゼ感情の「ぞっとする」感じにも適用することができる。つまり、オットーが「直観」「預覚／直感」「魂の根底」などの言葉によって説明を試みた、ヌミノゼの「感じ」が生じるメカニズムを現代科学的に説明することができる。

オットーが「ヌミノゼ感情」を論じる上でさらに強調しているのは、自然的（日常的な）「恐れ」と宗教的「畏れ」の「質的違い」である。彼は、日常的な「恐れ」と「宗教的畏れ」（超自然的存在に対する畏怖の感情＝ヌミノゼ感情）の違いは、程度差ではなく質的差異であり、「ぞっとする」という身体的反応を伴うのは後者のみの特徴であるとした。それに対して、戸田山氏は、二種の「おそれ」を区別せず、蛇を怖がるのも幽霊を怖がるのも連続的に見ている。ここで「恐れと畏れは同類なのか異なるのか」という論争に持ちこむのではなく（というのも定義問題に陥るため）、「なぜ聖なる存在に対する感情は「恐れ」に似た感情である（と見なされてきた）のか」という問いに代えてみるならば、戸田山流の説明はおそらく次のようになるだろう。「聖なるものの体験も、ホラー鑑賞体験も、身体的反応が一緒（「鳥肌が立つ」）だから、同じ「恐れ」という言葉によって表象されてきた」。そして、なぜそのような身体的反応を伴うのかについては、「進化の過程で必要とされたから」、という説明になるのではないか（戸田山氏によれば、蛇を「恐れる」身体的反応は、危険を回避するため、進化の過程で必要になった）。

ならば、宗教的感情は、進化のどの過程でなぜ必要になったのだろうか？

宗教論ではない『恐怖の哲学』はそれには言及していない。だが、この問いは、ホラーを説明する上でも重要なのではないか。というのも、「蛇を「恐れる」身体的反応は、危険を回避するため、進化の過程で必要になった」という説明と、終盤の「怖いものを人はなぜ求めるのか（なぜホラーを楽しめるのか）？」「それは恐怖そのものが快楽をもたらすからだ」という説明の間にはギャップがあるからである。とすると、「蛇を怖がる」情動と「ホラーを怖がる」情動は連続的で

はなく、後者は進化の過程でより後の方で現れ、さらにそこでは言語・社会・文化が大きな影響力を与えるという常識的な見取り図に回収されるのだろうか？ その転機をもたらしたのは、日常生活の安定化・安心化（＝戸田山氏のいう「(ホラー)が虚構だという信念が、認知の上位レベルから介入して行動に「待った」をかける」ようになるための社会的条件）？ つまり、「蛇を怖がる」「聖なるものを畏怖する」「ホラーを怖がりつつ愉しむ」という3種の情動の発生をたとえば日本史のタイムスパンの中に置けば、古代～中世は、おそろしいものは神として祀り上げることで鎮めようとしたが、日常的な危険が減少し社会が安定する江戸時代には、娯楽としての怪談が流行り、さまざまな妖怪が表象されるようになった（「表象の多様化」の加速）、という（やや通説化した）説になるのだろうか？

## ②テロを正当化するとされる「過激思想」とは何か？

2000年代半ばから、主としてイスラーム教徒を名乗るテロリストを、「イスラーム過激派」、その思想を「過激思想」と呼ぶ用法が日本のメディアで一般化した。この言葉は、(適切ではないとされた)「イスラーム原理主義」に代わる、一部の危険分子を指すための言葉として広がったと考えられる。英語ではこの「過激派」「過激思想」に対応するのは「radical/ism」ではなく「extremism」である。

もともと「過激派」は「穏健派」の対語だが、上記の用法では単に「危険な組織」を指すために使われているように見える。「過激派」「過激思想」とは、テロ攻撃を恐れる側が相手かまわず貼りつける“レッテル”なのだろうか。それとも、貼り付けられた側の「過激さ」の中身には何らかの共通性はあるだろうか。あるいは、こうも問えよう。「過激思想」を「過激」足らしめるのは、社会に恐怖をもたらすほどの大きな暴力行為なのか。それとも思想の反体制性・反社会性なのか。

少なくとも、宗教に結びつけられる近現代の「過激思想」(ジハード主義、攻撃的なプロテスタント福音派、ヒンドゥー・ナショナリズム、焼身による抗議運動を行うチベット仏教僧、戦前の日蓮主義 etc.)に限定すれば、「暴力性」「反体制性」「反社会性」以上の共通性が認められる。第一に、公正(justice+fairness)な社会の実現を早急に求めていること(「穏健」に対する「過激」)。第二に、世俗的・近代的方法(西洋的民主主義・国民国家)では社会的公正は達成できないという認識があること。第三に、自分の宗教は最善の方法を提供するという信念があること。さらに、その宗教の本来の姿を追求していると自認していることがあるが、この4点目は近代以前の宗教的「異端」と共通する特徴である(逆から言えば、前近代の「異端」は、千年王国運動などを生み出す場合もあるが、必ずしも社会的平等を求める運動ではない)。

「過激思想」にはもう一つ特徴がある(こちらは宗教関係に限定されない)。それは、危険視されているが、必ずしも少数者のみが持つ思想ではなく、(潜在的)共感者も多いというものである。これについては、過激思想は「異常な」思想というより、公正という問題につきまとう社会内のジレンマ・二律背反のうち、一方だけを理想として徹底したもの(ゆえに英語では extremism)だからという一つの説明が可能である。

だが、以上のような説明が通用したのは、アルカイダまで、せいぜいISの建国までだった。最近のローンウルフ型テロの「恐さ」は、上記のような合理的な説明をはねつける、実行犯が「何を考えているのかわからない」ところの恐さである。つまり、もはや「過激」という言葉では現在のテロの恐怖はとらえ切れなくなっている。メディアや識者がテロリストの生い立ちや社会的要因からの説明を試みることはあっても、恐怖が和らがないのは、「自分もまきこまれるかもしれない」恐れが身体感覚として得られるようになったためであろう。「得体のしれない」怖さ、言うなれば「テロリズムのホラー化」が発生しているのが現在の状況なのである。